

日本中國學會報 第七十集  
二〇一八年十月六日 發行 拔刷

廖平の今古學と『春秋穀梁傳』

吉田 勉

# 廖平の今古學と『春秋穀梁傳』

吉田 勉

## はじめに

廖平（字は季平。一八五二～一九三二）は、晩清から民國にかけての四川の經學者。その晩年の號、六譯は、自身の學說が生涯六回にわたって變化したことに由來するものであり、彼はまた特にその點で著名であるように思われる。しかし、その經學に關する研究は、これまで必ずしも十分になされてきたとは言い難く、總論的・概說的段階に止まっている觀がある。その廣汎な著作の個別具體的解明は、今後の研究に俟つものであると言えよう。<sup>1)</sup>

廖平の經學の精華は、劉師培がその學を評して「『春秋』に長じ、善く禮制を説く（長於『春秋』善說禮制）」と述べているように、<sup>2)</sup>『春秋』及び禮制の學に在ったとされる。この言の通り、初變期に著された『今古學考』は、今文古文の分類に禮制という独自の觀點を用いた書であり、廖平の代表的著作と目される。また該書を一讀して氣づくのは、春秋三傳のうち特に『穀梁傳』が重視されていることである。同時期にはその注釋書として『穀梁古義疏』（以下『古義疏』と略稱）も著されている。従つて、廖平の『穀梁傳』解釋を探ることは、その學說を

理解する重要な手がかりとなろう。本稿はその初歩的研究として、以下の諸點に對する考察を進めてゆく。

まず第一節では、廖平の學說と『穀梁傳』とがいかなる關聯を有するかについて、初變期の學說を整理しながら考察してゆく。加えて、この時期に『古義疏』が著されるに至つた經緯をたどること、<sup>3)</sup>『古義疏』の目的と特徴の一端とを明らかにする。次に第二節では、『古義疏』中に見られる『穀梁傳』の成立・傳承に對する廖平の見解を檢討する。この點についての廖平の特異な説は、鄙見によれば、第一節で檢討する諸點と深く關わるものだからである。

以上の檢討を通じて、初變期の學說と『穀梁傳』との關係を探るとともに、『古義疏』の特性をも見出すことで、廖平の『穀梁傳』觀とも言うべきものを明らかにすることが、本稿の目的である。<sup>4)</sup>

## 一 『今古學考』と廖平の『穀梁傳』研究

### (一) 『今古學考』と初變期の學說

廖平の初變期の學說は、主として『今古學考』中に述べられている。この書は許慎『五經異義』に着想を得て、禮制により諸經傳を「今學」

と「古學」とに分類し、その上で兩者それぞれの特徴を整理・解説したものである。上巻には自説を端的に示した二十の表を、下巻には上巻の各表に對する解説百六條を收める。その分類の様相を、まずは上巻の「今古學宗旨不同表」から読み取つてゆくこととしよう。この表は、上段に今學の、下段に古學の特徴を、それぞれが對になる形で示したものである。なお〔 〕内は廖平の自注で、以下の引用中の表記もこれに倣う。

今古學宗旨不同表

今祖孔子	古祖周公
今「王制」爲主	古「周禮」爲主
今主因革（參用四代禮）	古主從周（專用周禮）
……	……
今孔子晚年之說	古孔子壯年主之
今經皆孔子所作	古經多學古者潤色史冊
今始于魯人、齊附之	古成于燕趙人
……	……
今學意主救文弊	古學意主守時制
……	……
今經唯存『公』『穀』、范氏以古疑今	古經皆存、鄭君以今雜古學
……	……
以上說皆見下卷	以上說見下卷

（ここでまず注目すべきは、「今は因革を主とす（四代の禮を參用す）」、「古は從周を主とす（専ら周の禮を用ふ）」と述べている箇所である。廖平は、

古學が専ら周の禮制を用いるのに對し、今學は虞夏殷周四代の禮制があるいは因襲し、あるいは改革しながら用いるのだとする。これは、二學で主眼とする意圖が異なるからであり、「古學の意は時制を守るを主とす」る一方、「今學の意は文弊を救ふを主とす」るためだとする。また、それぞれの根據となる禮制を記載した文献として、「今は「王制」を主と爲す」「古は「周禮」を主と爲す」と記して、『禮記』王制篇及び『周禮』を擧げている。

そして、この今古兩學の相違は、「今は孔子晚年の說」「古は孔子壯年、之を主とす」とあるように、孔子の年齢による主張の變化に由来するといふ。下巻では以上のことを次のように解説している。

孔子は初年、禮を問ひ、「周に従ふ」の言有り。是れ王命を尊び、大人を畏るの意なり。晩年に至り、道の行はれざるを哀れむも、手を假りて自ら其の意を行ひ、以て弊を挽き偏を補ふを得ず。是に于いて心に爲さんと欲する所の者を以て之を「王制」に書し、之を『春秋』に寓す。當時の名流は此の議論に同じからざるは莫し。所謂「因革繼周」の事なり。……其實、孔子一人の言なるも、前後、同じからず。予、謂ふ、「從周」は孔子少壯の學たり、「因革」は孔子晩年の意たりとは、此れなり。（孔子初年間禮、有「從周」之言。是尊王命・畏大人之意也。至于晩年、哀道不行、不得假手自行其意、以挽弊補偏。于是以心所欲爲者書之「王制」、寓之『春秋』。當時名流莫不同此議論。所謂「因革繼周」之事也。……其實孔子一人之言、前後不同。予謂「從周」爲孔子少壯之學、「因革」爲孔子晩年之意者、此也。）

（下巻第四條）

孔子自身の思想が壯年の「從周」から晩年の「因革」へと變化したことを述べた上で、周の文弊を救おうというその晩年の理想は、王制

篇及び『春秋』に假託されているとするのである。

さて、孔子自身に内在するこの思想の相違は、下つて弟子たちの代に學派の分派を生ずることとなる。その分派がやがて今學派・古學派として定着するのであるが、廖平は地理的觀點を取り入れながら、その經緯を次のように述べている。

魯は今學の正宗たり、燕趙は古學の正宗たり。其の支流分派はやや同じからざる有りとも雖も、然れども大旨は一なり。魯は乃ち孔子の郷國にして、弟子に孔子晩年の説多く、學者以て定論と爲す。……此れ魯の今學、孔子の同郷にして晩年の説を宗として、以て宗派と爲る者たるなり。燕趙の弟子は、未だ『春秋』を修めざる以前に、辭して先づ反り、惟だ孔子の「從周」の言を聞くのみ。已後の改制等の説は未だ面領を経ず、前説と相ひ反するに因りて、遂に魯の弟子、偽りて此の言を爲して孔子に依託すと疑ふ。……故に篤く前説を守り、魯學と相ひ難ず。……此れ古學派、孔子の時制を兼采するに遠くして、流れて別派と爲る者たるなり。……齊人は二學の間に聞して、郷土の聞見の圍せらるる所と爲り、雜采せざる能はず。乃ち心に善を兼ねんと欲して、遂に繩尺とする所を失ふ。惟だに今學、無き所を用ふるのみならず、竝びに今學に明文有る者も、亦た皆、新を喜び異を好み、古學を雜入し、今は今ならず、古は古たらずして、施行する能はず。(魯爲今學正宗、燕趙爲古學正宗。其支流分派雖小有不同、然大旨一也。魯乃孔子郷國、弟子多孔子晩年説、學者以爲定論。……此魯之今學、爲孔子同郷宗晩年説、以爲宗派者也。燕趙弟子、未修『春秋』以前、辭而先反、惟聞孔子「從周」之言。已後改制等説未經面領、因與前説相反、遂疑魯弟子偽爲此言依託孔子。……故篤守前説、與魯學相難。……此古學派、爲遠于孔子兼采時

廖平の今古學と『春秋穀梁傳』

制、流爲別派者也。……齊人聞于二學之間、爲郷土聞見所圍、不能不雜采。乃心欲兼善、遂失所繩尺。不惟用今學所無、竝今學有明文者、亦皆喜新好異、雜入古學、今不爲今、古不爲古、不能施行。(下卷第十九條)

燕趙の弟子たちは壯年の説のみを受けて師のもとを去つたため、これらの地方では専ら古學が盛んになつた一方、魯の弟子たちは晩年の説を受けたため、魯では今學が盛んになつたのだとする。さらに、兩地方の中間に位置する齊では今學・古學を兼采したことを述べる。これが、上掲の表に「今は魯人に始まり、齊、之に附す」「古は燕趙人に成る」と記していたことと對應する。

そして、本條にも述べられているように、燕趙の古學と魯の今學とは分派當初から互いに難じ合い、また先秦兩漢を通じて避け合つていたのであるが、表中に「古經は皆存し、鄭君、今を以て古學に雜ふ」と記しているように、二學は鄭玄に至つて混同され、本來の面目を失つてしまつたとする。下巻の次の一條には、その鄭玄に對する批判とともに、自身の今古學説への深い自負が窺える。

鄭君の學、主意は今古を混合するに在り。予の經を治むるは、力めて鄭と反し、其の誤り合する所の處を將て悉く分出を爲すを意ふ。經學は鄭に至りて一大變し、今に至りて又た一大變す。鄭は變じて古に違ひ、今は變じて古に合す。之を離せば兩つながら美なるも、之を合すれば兩つながら傷る。其の要領を得て以て繁難を御せば、有識者は自ら能く之を別つ。(鄭君之學、主意を混合今古。予之治經、力與鄭反、意將其所誤合之處悉爲分出。經學至鄭一大變、至今又一大變。鄭變而違古、今變而合古。離之兩美、合之兩傷。得其要領以御繁難、有識者自能別之。)

鄭玄が二學を混合したことを非難しつつ、自身の今古學こそは兩者

(下卷第六十一條)

を分離して本来のあり方に戻すものであると述べて、その意義を強調するのである。

(二) 『今古學考』中の『穀梁傳』の位置づけ

上に見たように、廖平は禮制によつて今學・古學を分け、それぞれの禮制は『禮記』王制篇及び『周禮』に載せられているとしていた。この自説に基づいて、王制篇の制度に合致するものを今學、『周禮』の制度に合致するものを古學として諸經傳を分類したものが、『今古學考』巻上に收める次の表である。

今古學統宗表

<p>「王制」爲今學之主 『穀梁』全同「王制」 『儀禮』記爲今學 『戴記』有今學篇 『公羊』時參古學 『魯詩』 『魯論語』〔以上魯〕</p>	<p>『周禮』爲古學之主 『孝經』爲古學 『儀禮』經爲古學 『戴記』有古學篇 『左傳』時有緣經異說 『逸禮』古學</p>
--	--

ここで注目したいのが、春秋三傳の位置づけ、とりわけ上段の今學内部における『穀梁傳』と『公羊傳』との關係である。兩者を比較すると、『穀梁傳』が一段高く擡頭されていることが見て取れよう。

これは、『穀梁傳』中の禮制が今學の根據となる王制篇と完全に合致するのに對し、『公羊傳』は間間、古學の説をも載せているからである。また、そればかりでなく、今學諸經の中でもとりわけ『穀梁傳』

が高く位置づけられているが、これはひとえに、『穀梁傳』中の禮制が王制篇と盡く合致することによる。<sup>⑦</sup>

下巻の次の一條には、その『穀梁傳』重視の姿勢が強く窺える。

今古の經傳、唯だ『春秋』を存するのみ。「王制」「周禮」は皆、三傳の據りて以て今古の分を爲す所の者なり。四家は今古の正宗、同異の原始たり。二門既に別れ、然る後、先師各々習ふ所に困せられ、推して以て『易』『書』『詩』『論語』『孝經』を説く。凡そ此の五經の今古の説は、皆、後來附會の談にして、本義に非ざるなり。『春秋』を説きて孔子修述の旨を得る者は、三傳の中、唯だ『穀梁』のみ。(今古經傳、唯存『春秋』。「王制」「周禮」皆三傳所據以爲今古之分者。四家爲今古之正宗、同異之原始。二門既別、然後先師各困所習、推以説『易』『書』『詩』『論語』『孝經』。凡此五經今古之説、皆後來附會之談、非本義也。説『春秋』得孔子修述之旨者、三傳之中唯『穀梁』。)

(下巻第三十三條)

『春秋』を説きて孔子修述の旨を得る者は、三傳の中、唯だ『穀梁』のみ」とは、『穀梁傳』に對する最大の贊辭と言えらう。「春秋三傳」と總稱されながらも、『左氏傳』『公羊傳』と鼎立するほどの勢いを持ち得なかつた『穀梁傳』に對して、これだけの價値を認めていることは、廖平の『穀梁傳』觀の大きな特徴と言える。廖平は、孔子が晩年に自身の理想とする禮制を王制篇に託したとしていたが、その王制篇の記述と一致することから、『穀梁傳』こそが最も孔子の本意を得ているとするのである。

このように、『今古學考』中の記載からは、初變期において廖平が『穀梁傳』を特に重視していたことが読み取れる。また實際に、廖平は同時期に『穀梁傳』の注釋書である『古義疏』を著してもいる。しかし

ながら、後述するように、年譜等によつて廖平の『穀梁傳』研究をたどつてゆくと、その開始は初變以前に遡ることが知られる。つまり、その『穀梁傳』研究は、初變期の學說とは没交渉に始められたものである。むしろ、その蓄積があつたからこそ、後に王制篇と『穀梁傳』とが合致することに思い至つたとも言えるだろう。そこで、次項では廖平の『穀梁傳』研究の開始時に遡つて、初變を経てやがてそれが『古義疏』として結實するに至る過程をたどることとしたい。

### (三)『遺說考』から『古義疏』へ

廖幼平『廖季平年譜』には、廖平が光緒六年(一八八〇)、すなわち二十九歳の時に初めて『穀梁傳』を修めたことが見える。また、同年には『穀梁先師遺說考』(以下『遺說考』と略稱)四卷を成したという。『遺說考』は現在、散佚して傳わらないが、『光緒井研志』藝文志にその提要を載せており、該書の梗概を知ることができる。提要に云う。

『公羊』の師説は、董子、具さに存す。『穀梁』は劉向を以て大師と爲し、『說苑』『新序』『列女傳』『漢書』五行志・『五經通義』『世本』に散見するもの凡そ數千條。近人、『穀梁』の師説を輯むるは皆、脱漏す。此の本、劉の外に于いて、兼ねて尹・梅・班・許及び兩漢の師説を采り、陳左海『三家詩先師遺說考』の例に仿ふ。諸本に較べて詳らかなりと爲す。諸説、多く『穀梁古義疏』中に收入す。故に『古義』は本より更に引く所の原書を注せずと云ふ。『公羊』師説、董子具存。『穀梁』以劉向爲大師、散見『說苑』『新序』『列女傳』『漢書』五行志・『五經通義』『世本』凡數千條。近人輯『穀梁師説』皆脱漏。此本于劉外、兼采尹・梅・班・許及兩漢師説、仿陳左海『三家詩先師遺說考』例。較諸本爲詳。諸説多收入『穀梁古義疏』中。故『古

廖平の今古學と『春秋穀梁傳』

義』本不更注所引原書云。

これによれば、廖平は廣く尹更始・梅福・班固・許慎らの説に及びつつも、とりわけ劉向説を中心として兩漢における『穀梁傳』の師説を蒐集し、この書を成したという。劉向は『漢書』等で穀梁家とされているから、その説を丹念に集めたものと思われる。

本書が廖平にとつて最初の『穀梁傳』研究の成果であるが、そもそも廖平はなぜ遺説の蒐集から着手したのであろうか。それを考えるヒントになるのが、後に書かれた『古義疏』の自序である。そこで廖平は次のように述べている。

『穀梁』は宣・元の間に顯るるも、一世に及ばず。東漢以來、名家遂に絶ゆ。舊説、存すと雖も、更に誦習する無し。范氏、其の闇弱なるをうかがひ、幸を希ひて竊據し、何・杜に依附し、濫りに子姓を入るれば、既に専門の學に非ず、且つ傳を攻むるを以て能と爲す。末學、膚受し、誦記に便なるを喜び、立ちて學官に在ること、歷世千載なり。夫の素王の撰述、魯學の獨專を原ぬるも、俗義、晚張し、舊解、全く佚す。(『穀梁』顯于宣・元之間、不及一世。東漢以來、名家遂絶。舊説雖存、更無誦習。范氏視其闇弱、希幸竊據、依附何・杜、濫入子姓、既非専門之學、且以攻傳爲能。末學膚受、喜便誦記、立在學官、歷世千載。原夫素王撰述、魯學獨專、俗義晚張、舊解全佚。)

右の記述からは、范甯の『穀梁傳』注に對する不滿を讀み取ることが出来る。『公羊』『左氏』二家の説に出入し、時として傳文への不信さえ表明する范甯注の缺點を補うためには、自ら「魯學」の「舊解」を明らかにする必要があつた。廖平が『遺說考』から研究を開始した背景には、范甯注への不滿があつたと言えるだろう。

そして、『光緒井研志』にも記されていたように、やがて廖平はこ

の『遺說考』を材料の一つとして、傳全體に對する注釋書、『古義疏』の執筆を開始する。廖平は『古義疏』が成るまでの經緯を、前引の箇所に續けて、自序で以下のように振り返っている。

辛巳中春、微言の久しく隕つるを痛み、絶學の競はざるを傷み、發憤して自ら矢ひ、首めに『遺說』を纂し、間々傳例に就きて推比して之を解す。癸未、都門に計偕し、舟車もて南北するに、冥心潛索し、素王・二伯の諸大義を得。甲申初秋、偶々「王制」を讀み、怍として頓悟する有り。是に于いて向の疑ふ者は盡く釋けて信ずる者は愈々堅し。蒙翳、一新し、豁然として自達す。乃ち舊藁を取りて重ねて之を録す。(辛巳中春、痛微言之久隕、傷絶學之不競、發憤自矢、首纂『遺說』、間就傳例推比解之。癸未、計偕都門、舟車南北、冥心潛索、得素王・二伯諸大義。甲申初秋、偶讀「王制」、怍有頓悟。于是向之疑者盡釋而信者愈堅。蒙翳一新、豁然自達、乃取舊藁重録之。)

これによれば、その『穀梁傳』研究の開始に當たつて、『遺說考』を編纂しながら傳例の研究を進め、光緒九年(癸未・一八八三)、北京への會試の途上、傳中の大義についていくつか悟るところがあつたといふ。また、この間、その成果を注釋の形で書きためていたことが想像される。それは翌十年(甲申・一八八四)に舊稿に加筆したことを述べているからで、その加筆は同年に王制篇を讀んで頓悟した内容を盛り込んだものであつた。『廖季平年譜』によれば、この光緒十年の秋に『古義疏』は成立した。

以上のことを整理すれば、廖平の『穀梁傳』研究は、『古義疏』の成立に至るまでに大きく二つの段階を経たものと言えよう。

一つは、初變以前に進められた師説の蒐集、すなわち、范甯以前の

『穀梁傳』解釋の探求である。自序の言によれば、これは魯學の「絶學」たる『穀梁傳』の「微言」を闡明することを動機として開始されたものであつた。この成果が、『遺說考』である。

いま一つは、初變以後の、自身の今古學體系中に『穀梁傳』を位置づけ、解釋するという段階である。この段階では、『穀梁傳』と今學の根幹たる王制篇の禮制とは合致するといふ、自身の初變期の學説を盛り込みつつ傳を説くことに意を用いた。

従つて、『古義疏』には、漢代以前の舊解を提示することと、自身の初變期の學説の展開といふ、二つの異なる要素が含まれて見ることが出来るだろう。後者は廖平の學説と密接に關聯するものであり、廖平の穀梁學のみならず、その今古學の解明にも不可欠な材料である。また、前者はその取捨に廖平の意圖が反映されているとはいへ、『古義疏』では劉向説に限つても六百條近くの豊富な引用がなされており、それらは漢代穀梁學の實態を窺い知るに當たつて、有用な資料となる可能性を持つ。

このように、これら『古義疏』中の二要素は今後、それぞれが研究されるべきものであると考へるが、その際にも留意すべきこととして、『穀梁傳』の成立と傳承とに對する廖平の説が擧げられる。この點について、廖平は特異な説を唱えており、その説は『古義疏』全體を通じて繰り返し述べられているからである。加えて、この點に對する廖平の見解は、以上で見てきた、『穀梁傳』を特に重視することと、先師の遺説を蒐集したこととの二點と、相互に關聯していると思われる。そこで次節では、『穀梁傳』がどのように成立し、傳承されたかに對する廖平の説を『古義疏』中から取り上げ、検討することとしたい。

## 二 『穀梁傳』の成立・傳承に對する見解

『古義疏』の卷頭、「重訂穀梁春秋經傳古義疏卷一」なる標題の下に、廖平は次のように記している。

經成り、以て子夏に授く。子夏、經に傳す。即ち大傳を著し、大綱を發明し、傳へて學者に示す。卜商首めて『春秋』を受く。故に以て其の學に氏す。此の傳、又た先師授受し、弟子の發問に因りて師、舊傳を引き以て之に答ふることを、服問・喪服の傳と同じ。故に傳中凡そ「傳に曰はく」と引く者は、即ち子夏の舊傳、是れなり。今本は江公の傳ふる所たりて、其の魯に居るに因りて、『魯詩』と與に世々魯學と稱せらる。漢の時、『穀梁』に五家の傳本有りて、各々異同有り。故に劉子の引く所の傳文、聞々今本の無き所たるは、皆、別家の佚文なり。（經成、以授子夏。子夏傳經。即著大傳、發明大綱、傳示學者。卜商首受『春秋』。故以氏其學。此傳又先師授受、因弟子發問而師引舊傳以答之、與服問・喪服傳同。故傳中凡引「傳曰」者、即子夏舊傳是也。今本爲江公所傳、因其居魯、與『魯詩』世稱魯學。漢時『穀梁』有五家傳本、各有異同。故劉子所引傳文、聞爲今本所無、皆別家佚文也。）

この記述は、『穀梁傳』の成立及び傳承に對する廖平自身の考えを總論的に述べたものと言える。以下、この記述に依據しつつ、『古義疏』中からこれと同等の説や具體例を取り上げること、傳の成立・傳承に對する廖平の説をそれぞれ整理してゆくこととしたい。

### (一) 『穀梁傳』の成立について

右の引用の冒頭で、廖平は『春秋』經が成立した後、子夏（卜商）

廖平の今古學と『春秋穀梁傳』

がそれに對して「大傳を著し」たとしている。

子夏と『春秋』との關係は、先秦兩漢を通じて複数の文獻に述べられており、兩者を結びつけるのは必ずしも特異なことではない。<sup>12</sup> しかしながら、子夏が傳を「著」したとするのは、廖平説の一つの特徴と言える。それは、例えば『公羊傳』徐彥疏に述べられているように、一般に、經説は口傳により繼承され、それが書物の形を取ったのは漢代に至つてからとされるからである。<sup>13</sup>ところが廖平は、子夏の時點ですでに春秋傳の著作があつたとするのである。

そして、右の引用中に「此の傳、又た先師授受し、弟子の發問に因りて師、舊傳を引き以て之に答ふ」と言い、「故に傳中、凡そ「傳に曰はく」と引く者は、即ち子夏の舊傳、是れなり」とあるのも、この子夏の傳に關する言及である。これは上で「大傳」と稱していた子夏の「舊傳」を、今本『穀梁傳』でもしばしば引用しているとの説である。

この説は『古義疏』中に繰り返し述べられている。一例として、莊公三年經「五月、桓王を葬る（五月、葬桓王）」以下の傳文への注が擧げられる。當該傳文は、冒頭に「傳に曰はく」なる言を冠して記述がなされているが、『古義疏』はこれについて、「傳は、舊傳の文。説は「公羊」と同じ（傳、舊傳文。説與「公羊」同）」と注する。この指摘の通り、實は同一經文に對する『公羊傳』には、『穀梁傳』の「傳に曰はく」以下の説と同一の説が述べられている。<sup>14</sup>従つて、可能性としては『穀梁傳』に稱する「傳」とは『公羊傳』のことであり、『穀梁傳』はここで『公羊傳』を引用したのだとも考えられる。事實、後述のように、そのような指摘も廖平以前になされているが、廖平はこれを『公羊傳』からの引用とは見なさず、子夏の舊傳からの引用とするのである。『古

義疏』中には「舊傳の語」「舊傳の文」などといった語が頻出するが、そこに言う「舊傳」とは、いずれも子夏の舊傳を指して言ったもの、他ならない。

また「傳に曰はく」の例に類するものとして、『穀梁傳』中には「一傳に曰はく」や「或いは曰はく」と記して或説を引用する箇所がいくつあるが、それらに對する廖平の解説にも、傳の成立に對する彼の見解が反映されている。莊公二年の次の箇所を見てみよう。

〔經夏、公子慶父、師を帥めて於餘丘を伐つ。(夏、公子慶父帥師伐於餘丘。)

〔傳國にして伐つと曰ふ。於餘丘は、邾の邑なり。其の伐つと曰ふは、何ぞや。公子は貴し。師は重し。而して人の邑に敵す。公子病ましめらる。公子を病ましむるは、公を譏る所以なり。其の一に曰はく、君在りて之を重んずればなり。(國而曰伐。於餘丘、邾之邑也。其曰伐、何也。公子貴矣。師重矣。而敵人之邑。公子病矣。病公子、所以譏乎公也。其一日、君在而重之也。)

傳文末尾に「其の一に曰はく」として或説を擧げているが、『古義疏』は同年の『公羊傳』を引用しつつこれに注して、

『公羊』に「曷爲れぞ之を國とする。君、焉に存するのみ」と。『傳』と同じ。秦以前は、『傳』と『公羊』と分かれず。(『公羊』「曷爲國之」と同じ。秦以前は、『傳』と『公羊』と分かれず。)

君存焉爾。」與『傳』同。秦以前、『傳』與『公羊』不分。と述べ、或説がやはり『公羊傳』と同一の説であることを指摘している。しかし、ここで注目すべきは、「秦以前は、『傳』と『公羊』と分かれず」と述べている箇所である。この記述にも、傳文中の或説がやはり『公羊傳』からの引用ではない、との考えが暗示されているが、それに加えて、廖平はここで、『穀梁傳』と『公羊傳』とはともに秦

以後に分派したものだ、と述べているのである。

同様の説は他の箇所にも見られる。『穀梁傳』定公元年には「沈子」なる經師の説を引くが、同年の『公羊傳』にも「子沈子」の説を引いている。『古義疏』はこれについて次のように述べる。

『公羊』引きて「沈」の上に「子」字有り。二傳同じく沈子の説を引く。是れ二傳、先師を同じくす。秦以前は、家法大いに同じきなり。(『公羊』引「沈」上有「子」字。二傳同引沈子説。是二傳同先師。秦以前、家法大同也。)

ここでもやはり、二傳が秦以前には分派を生じていなかったことを述べているのである。

それでは、廖平は、傳がいつ、どのように分派・成立したと考えているのだろうか。桓公二年の「春、王の正月、戊申、宋の督、其の君與夷を弑す(春、王正月、戊申、宋督弑其君與夷)」「其の大夫孔父に及ぶ(及其大夫孔父)」という一連の經文に對する傳文中にも、「或いは曰はく」として或説が引かれているが、それに對する『古義疏』の次の記述は、そのことを考える一つのヒントとなろう。

此の説は上と同じからず。凡そ同じからざる者は、『傳』は乃ち「或いは曰はく」「一傳に曰はく」と言ふ。一師の言に非ざるも、但だ大いに異同無ければ、皆、説者を出して主名せざるのみ。

『傳』は蓋し衆師の説を合して成る者なり。(此説與上不同。凡不同者、『傳』乃言「或曰」「二傳曰」。非一師之言、但無大異同、皆不出説者主名。『傳』蓋合衆師説而成者。)

ここでは、「或いは曰はく」の上下で説が異なることを述べた上で、それぞれの説は別の經師から出たものだとする。そして、『穀梁傳』は、沈子をはじめとするそれら複数の師説を集積して成立したものだだろう

とするのである。

『穀梁傳』の具體的な成立時期について、廖平は明言していないため、はつきりしたことは分からない。ただ、右に見てきたことと、本節冒頭の引用中に「今本は江公の傳ふる所たり」とあることによれば、秦漢の際に、子夏の舊傳や、その他の師説を合して、今本につながる『穀梁傳』が成立したとされているようである<sup>16)</sup>。

さて、廖平は以上のように『穀梁傳』の成立を述べるのであるが、そもそも公穀二傳の先後を論じた諸家の説では、『穀梁傳』は『公羊傳』よりも後出とされ、その著述目的の一つに『公羊傳』への對抗があったとされる。右に見てきた傳文中の或説を『公羊傳』説の引用と見なすことができ、また時にそれに對して『穀梁傳』が反駁を加えていることから、そのような説が唱えられている。北宋の劉敞『春秋權衡』や、清の陳澧『東塾讀書記』、そしてそれらを祖述した皮錫瑞『經學通論』などがその代表的なものと言えよう<sup>17)</sup>。しかし、廖平はこの説に従わなかった。そこには、『穀梁傳』の晩出を否定することで、輕視されがちな『穀梁傳』の地位を高めようとする意圖が隱されているのではなからうか。『穀梁傳』の成立に關する廖平の説には、『公羊傳』よりも『穀梁傳』をより重視する、自身の初變期の學説が反映されていると言えよう。

## (二) 『穀梁傳』の傳承について

次に、『穀梁傳』が漢代に至るまで、どのように傳承され、流通してきたかに對する説を整理してゆくこととしよう。これについて注目すべきは、本節冒頭の引用中の、「今本は江公の傳ふる所たりて、其の魯に居るに因りて、『魯詩』と與に世々魯學と稱せらる。漢の時、『穀

梁』に五家の傳本有りて、各々異同有り」と述べている箇所である。廖平は、漢代には今本のみに限らず、『穀梁傳』に五家の異本が存在していたとするのである。以下、便宜的にこの説を「五家本説」と呼ぶこととして、この特異な説についても「古義疏」中から具體例を擧げつつ、その詳細を検討してゆく。

まずは、五家本説が述べられている箇所の一例として、文公十二年の次の箇所を確認したい。

〔經〕二月庚子、子叔姬卒。(二月庚子、子叔姬卒。)

〔傳〕其の子叔姬と曰ふは、貴ければなり。公の母姉妹なり。其の一傳に曰はく、許嫁すれば以て之に卒いふなり。男子は二十にして冠し、冠して丈夫に列し、三十にして娶る。女子は十五にして許嫁し、二十にして嫁す。(其日子叔姬、貴也。公之母姉妹也。其一傳曰、許嫁以卒之也。男子二十而冠、冠而列丈夫、三十而娶。女子十五而許嫁、二十而嫁。)

この傳文に對する注として、班固『白虎通』嫁娶篇の記述が引用される。

班氏曰はく、『春秋穀梁傳』に、男は二十五にして繫心し、女は十五にして許嫁す。陰陽に感ずるなり」と。(班氏曰、「春秋穀梁傳」、男二十五繫心、女十五許嫁。感陰陽也。)

その上で、この注の説を、疏において次のように解説する。

陳壽祺云ふ、「今、『穀梁傳』に此の文無し。蓋し穀梁説なり」と。按ずるに、傳文に今本無き所の者多し。必ずしも皆は師説ならず。『傳』に五家有りて、今、一家を存す。故に佚傳有り。(陳壽祺云、「今『穀梁傳』無此文。蓋穀梁説也。」按、傳文今本所無者多。不必皆師説。『傳』有五家、今存一家。故有佚傳。)

ここに引用する陳壽祺説は、その『五經異義疏證』に見えるものであるが、陳壽祺が班固の引用する『穀梁傳』を『穀梁傳』の師説とするのに對し、廖平はそれを師説ではなく『穀梁傳』の本文そのものに他ならないとする。そして、その根據を五家本説に求め、班固の當時には『穀梁傳』に複数の傳本があつて、班固が引く傳文を載せるものが確かに存在したのであり、唯一遺つた今本にはその傳文が見られないだけだとするのである。

では、これら五家本はいつまで存在したのだろうか。これについても明言した文章は無いため、明確には特定できないが、異本との關聯を説かれる學者の下限が班固であることから推せば、後漢の初期までは五家本のうち少なくとも數家の本が併存していたと考えているようである。その後、傳承の過程でそれらが失われ、今本のみが遺つたとするのが、『古義疏』から読み取れる限りの説である。

また、そもそも、この五家本説は何に基づいたものであろうか。廖平はやはり、その根據となる出典を示していないが、『穀梁傳』と「五」という數字とを結びつけるものとして、『後漢書』賈逵傳の次の記載が挙げられよう。

賈逵、字は景伯、扶風平陵の人なり。……父徽、劉歆に從ひて『左氏春秋』を受け、兼ねて『國語』『周官』を習ひ、又た『古文尙書』を塗暉に受け、『毛詩』を謝曼卿に學び、『左氏條例』二十一篇を作。逵、悉く父の業を傳へ、弱冠にして能く『左氏傳』及び五經の本文を誦し、『大夏侯尙書』を以て教授す。古學を爲むと雖も、兼ねて五家『穀梁』の説に通ず。(賈逵、字景伯、扶風平陵人也。……父徽、從劉歆受『左氏春秋』兼習『國語』『周官』、又受『古文尙書』於塗暉、學『毛詩』於謝曼卿、作『左氏條例』二十一篇。逵悉傳父業、

冠能誦『左氏傳』及五經本文、以『大夏侯尙書』教授。雖爲古學、兼通五家『穀梁』之説。)

ここには、賈逵が父の影響を受けて古文の書を學ぶ一方で、今文の學をも兼修したことが述べられている。そして、引用箇所末尾に「五家『穀梁』の説」とある點が、五家本説との關聯を思わせる。これについて、李賢の注には、

五家は、尹更始・劉向・周慶・丁姓・王彥等を謂ひ、皆『穀梁』を爲むること、前書に見ゆるなり。(五家、謂尹更始・劉向・周慶・丁姓・王彥等、皆爲『穀梁』、見前書也。)

とあつて、具體的に五人の名を擧げている。彼らがいずれも石渠閣の論議に穀梁學者として參加したことは、李賢の指摘通り『漢書』儒林傳に見える<sup>18)</sup>。また、張預による『古義疏』の序には、『穀梁傳』について、「東京よりして後、漸く絶學と成り、尹更始等五家の傳説は久しく佚す(東京而後、漸成絶學、尹更始等五家傳説久佚)」と記しており、「尹更始等五家の傳説」とあるのも、李賢注と符合する。廖平が明言していないため断定はできないが、五家本説は『後漢書』賈逵傳とその注に基づくものであろう<sup>20)</sup>。

以上が五家本説の梗概であるが、この説は先に擧げた『白虎通』の例にも見られた通り、テキストの問題に觸れる際にしばしば援用される。そしてそれは、前節で確認した『古義疏』中の二つの要素のうち、漢代師説とも關聯してくる。『遺説考』において、廖平は劉向説を中心に師説を蒐集したことを確認したが、『古義疏』で劉向説を引用する箇所でも、五家本説が述べられるのである。その一例として、隱公三年經「三月庚戌、天王崩ず(三月庚戌、天王崩)」及びそれ以下の傳文全體に對する疏を見てみよう。

「傳に曰はく、「天王、何を以てか葬を書せざる。天子は崩を記し葬を記さざるは、其の時を必ずればなり。諸侯は卒を記し葬を記すは、天子の在る有れば、其の時を必せざればなり」と。其の時を必ずとは奈何。天子は七日にして殯し、七月にして葬る。諸侯は五日にして殯し、五月にして葬る。……」『說苑』脩文篇の引くに據りて補ふ。按ずるに、『穀梁』に五家本有りて、今、一家を傳ふるのみ。故に佚傳有りて、『公羊』と同じ。（傳曰、「天王何以不書葬。天子記崩不記葬、必其時也。諸侯記卒記葬、有天子在、不必其時也。」必其時奈何。天子七日而殯、七月而葬。諸侯五日而殯、五月而葬。……」據『說苑』脩文篇引補。按『穀梁』有五家本、今傳一家耳。故有佚傳、與『公羊』同。）

この箇所の前半で、廖平は劉向『說苑』を引用しているが、その冒頭に「傳に曰はく」とあって、それ以下の數句は、廖平自身も指摘する通り、同一經文に對する『公羊傳』そのものである。<sup>2)</sup>平心に見れば、『說苑』に引かれている「傳」が『公羊傳』であることは疑いようがない。しかし、廖平はそうとは認めない。「按ずるに、『穀梁』に五家本有りて、今、一家を傳ふるのみ。故に佚傳有りて、『公羊』と同じ」と述べて、この「傳」とは、『穀梁傳』五家本中の散佚した一本であり、そこには『公羊傳』と全く同じ傳文が記されていたのだとするのである。

現在では、劉向の春秋說に『公羊傳』『左氏傳』系統のものも多く含まれていることがすでに明らかにされている。しかし、廖平はその事實に氣づきながらも、五家本說を援用することで、あくまでも劉向を穀梁家として捉えようとしていたと言えよう。<sup>3)</sup>

以上、本節で検討した廖平說は、一般的な傳の成立・傳承に關する

說と比較すると特異なものと言えるが、その獨自性の由來するところを考察するとき、前節で確認した『穀梁傳』重視が想起される。

前節では、『今古學考』の記述から、廖平が『穀梁傳』を重視していたことを確認したが、自身の重視する『穀梁傳』が『公羊傳』より晚出となると、その正統性が搖らぎかねない。禮制の觀點からすると『穀梁傳』が純粹な今學である以上、古學を交えた齊學の『公羊傳』との關係は、『穀梁傳』が正、『公羊傳』が副となるはずであり、『穀梁傳』中に引用される「傳」や或説は『公羊傳』ではあり得ない。そこで、それらを子夏の舊傳や二傳に共通する先師の說と捉えることで、自說との整合性を圖つたものと考えられる。

また、『古義疏』中に引用する劉向說は、『穀梁傳』研究の開始に當つた『遺說考』に蒐集したものを材料としていた。劉向の春秋說には『公羊傳』『左氏傳』系統のものも多く含まれているのであるが、廖平はそれらの存在を基本的には認めず、その所說のほとんどを『穀梁傳』の師說とする。五家本說はこの場合にもやはり、その説明の術として用いられていた。『穀梁傳』の師說として傳わる説は決して多いたとは言えない。その上さらに劉向說をも吟味して選り出すとなると、その數は一層限られることになる。そこで廖平は五家本說を利用して、劉向說を『穀梁傳』の異本に基づくものとしたのだと考えられる。

## おわりに

以上、本稿第一節ではまず、『今古學考』に據りつつ初變期の學說を概観するとともに、その學說體系の中で『穀梁傳』がいかに位置づけられているかを探つた。廖平は、禮制を基準として今古學を分類した。そして、そのうち今學の禮制は、孔子が晩年に四代の制度を損益

して新たに定めたものであり、王制篇に記されているとしていた。従つて、王制篇の記述と一致する文献は、孔子晩年の理想を傳えたものと言える。廖平によれば、その最たるものが『穀梁傳』であり、その中の禮制は盡く王制篇と合致するという。それゆえ、三傳の中でも特に『穀梁傳』を重視し、高く位置づけたのである。

續いて、初變期に著された『穀梁傳』注釋書、『古義疏』に目を轉じ、該書が著されるまでの經緯をたどつた。その結果、『古義疏』には初變期の學說はもとより、初變以前に進められた漢代師說の蒐集の成果も盛り込まれていることを確認した。『古義疏』は廖平の經學ばかりでなく、漢代穀梁學の解明にも資する可能性を持つ書であると言える。

しかし、この『古義疏』中には、傳の成立及び傳承に關して特異な説が提示されており、注意を要する。第二節ではこれらを整理した上で、その淵源するところを考察した。

『穀梁傳』の成立について、經學史上議論となつてきたのは『公羊傳』との先後關係である。ここでは、『公羊傳』先成説が支配的であつたと見えるが、廖平はそれを否定した。『今古學考』において、『穀梁傳』は純粹な今學、『公羊傳』は古學を參雜した今學とされていたが、傳の成立に對する廖平の説は、『穀梁傳』を、『公羊傳』よりも優位に置くこの見解が反映されたものと言える。また、傳承については、漢代には五家の異本が存在したとする特異な説が提示されていた。これは傳の佚文と見られるものに理論的根據を與えるばかりでなく、自身の『穀梁傳』研究の開始に當たつて、漢代師說を廣く蒐集しようとしたことにも起因するものと考えられる。『古義疏』中にこの説が展開されているのは、これを援用することで、『古義疏』の記述を充實させようとする意圖の表れだと言える。

廖平によれば、王制篇は今學の理論的根據となる書であり、『春秋』はそれを歴史事實に即して敷衍した書であるという<sup>23)</sup>。本稿で見た通り、三傳のうち特に『穀梁傳』が今學の禮制に合致するというのであれば、『古義疏』に依據しつつ王制篇・『穀梁傳』兩書の具體的關聯を探ることで、廖平の今學の體系的解明が期待される。この點については今後の課題としたい。

## 注

(1) 國內における廖平の思想研究の專論としては、まず小島祐馬「廖平の學」『六變せる廖平の學』(同氏『中國の社會思想』、筑摩書房、一九六七年所收。初出はそれぞれ『藝文』八卷五號、一九一七年・『支那學』二卷九號、一九二二年)、藤堂虎雄「廖平の經學思想」(『漢學研究』第二輯、日本大學漢文學會、一九三七年)が挙げられる。これらは、六變した廖平の各期の學說や思想の主要傾向についての簡要な解説であるが、いずれも總論的なものである。各論としては、濱久雄「公羊學の成立とその展開」(國書刊行會、一九九二年)が、該書の主眼である清末公羊學の展開を論ずる中で廖平を取り上げ、主として常州學派との差異を明らかにしている。ただし、對象はあくまでも公羊學であり、本稿で論じる『穀梁傳』研究についてはほとんど言及されていない。國外に目を轉ずると、鄭偉「二〇世紀以來廖平穀梁學整理研究之回顧與展望」(『巴蜀文獻』第二輯、四川大學出版社、二〇一五年)は、『穀梁傳』に關するものを軸として、特に中國における廖平研究の動向を分析したものであるが、廖平の穀梁學についての研究は、彼の春秋學に關する研究の中でも最も不足している領域だと述べる。總じて、個々の著作の分析を通じて廖平の經學研究は、まだ緒に就いたばかりだと言える。

(2) 蒙文通『井研廖季平師與近代今文學』(舒大剛、楊世文主編『廖平全集』、上海古籍出版社、二〇一五年、第十六册所收)に引く劉師培の言。

(3) 廖平の學說變化の時期については複数の説があが、廖平の娘、廖幼平編『廖季平年譜』(巴蜀書社、一九八五年)によつてその期間と學說とを示せば以下の通り。

初變	光緒九年(一八八三)	〜	同十二年(一八八六)	平分今古
二變	光緒十三年(一八八七)	〜	同二十三年(一八九七)	尊今抑古
三變	光緒二十四年(一八九八)	〜	同二十七年(一九〇二)	言小統大統
四變	光緒二十八年(一九〇二)	〜	民國六年(一九一七)	分天人
五變	民國七年(一九一八)			以六書文字皆出孔子
六變	民國八年(一九一九)	〜	同二十二年(一九三二)	以『內經』說『詩』『易』

ただし、『廖季平年譜』には三變期の末年と四變期の初年との間に年代の不連続があるため、ここでは四變期の初年を『四益館經學四變記』(『廖平全集』第二册所收)自序により改めた。

(4) 趙沛『廖平春秋學研究』(巴蜀書社、二〇〇七年)は、廖平の春秋學に關する專著であり、『穀梁傳』についても一章を設けて多角的に論じている。その中でも特に、禮制との關聯を論じた部分は、本稿第一節の内容と重なる點がある。参照されたい。ただし、廖平の『穀梁傳』觀の背後にある、各期の學說や研究の經緯との關聯については、なお十分に檢討が及んでおらず、更なる考察の餘地がある。

(5) 『今古學考』の本稿での引用は、『廖平全集』第一册所收本(黃海德・楊世文校點)による。ただし、標點を改めた箇所がある。

(6) 『漢書』藝文志及び儒林傳では、『穀梁傳』は魯學、『公羊傳』は齊學とされ、廖平もこれに従っているから、ここでの二傳に關する記述は、

廖平の今古學と『春秋穀梁傳』

先に見た地理的區分とも合致する。

(7) 具體的に『穀梁傳』と王制篇のいずれの記述とが合致するかについては、『今古學考』卷下第六十七條に例が擧げられている。

(8) 光緒二十六年(一九〇〇)刊。のち一九七一年に臺灣學生書局から新修方志叢刊として影印出版。廖平は四川井研縣の人。

(9) 『漢書』楚元王傳及び儒林傳。ただし、劉向を穀梁家とする説には疑義も呈せられている。鄭玄『六藝論』には劉向が『公羊傳』を學んだことを記しており、桓譚『新論』正經篇及び王充『論衡』案書篇には劉氏一族が『左氏傳』に通達したことを記しているからである。これらの問題については、鎌田正『左傳の成立と其の展開』(大修館書店、一九六三年)第二編第一章、池田秀三『劉向の學問と思想』(『東方學報』五十、京都大學人文科學研究所、一九七八年)、野間文史『劉向春秋說攷』(『哲學』三十一、廣島哲學會、一九七九年)等を参照。

(10) 『穀梁古義疏』の本稿での引用は、郇積意點校本(十三經清人注疏、中華書局、二〇一二年)による。ただし、標點を改めた箇所がある。

(11) 辛巳は光緒七年(一八八一)。これは『廖季平年譜』で『遺說考』の成立を光緒六年としていたことと齟齬するが、いずれにしても光緒九年の初變以前の成立であることに變わりはない。

(12) 『韓非子』外儲說右上篇、『史記』孔子世家など。また、緯書にも同様の記載があったと考えられる。『公羊傳』原目の疏に引く閔因の敘を参照。

(13) 『公羊傳』何休序『春秋』を傳ふる者は一に非ず(傳『春秋』者非一)に對する徐彦の疏に「解に云ふ、孔子は至聖にして、却きて無窮を觀る。秦の無道にして、將に必ず書を燔かんとするを知る。故に『春秋』の説は、子夏に口授せらる。秦を度り漢に至り、乃ち竹帛に著さる(解云、孔子至聖、却觀無窮。知秦無道、將必燔書。故『春秋』之說、口授子夏。度秦至漢、乃著竹帛)」とある。

- (14) 『穀梁傳』には「傳に曰はく、改葬なり。云云（傳曰、改葬也。云云）」とあり、『公羊傳』には「此れ未だ崩を言ふ者有らず。何を以てか葬を書する。蓋し改葬なればなり（此未有言崩者。何以書葬。蓋改葬也）」とある。
- (15) この部分の訓讀については、岩本憲司氏の説に従った。同氏『春秋學用語集』（汲古書院、二〇一一年）【言伐者】の項を参照。
- (16) 廖平は『今古學考』巻下第三十八條で、「三傳の著録は、皆、先秦以前なり（三傳著録、皆先秦以前）」と述べている。これは本文で見てきた、秦以後になつて『穀梁傳』『公羊傳』の分派が生じたとする説と矛盾する。『古義疏』一書中にはこのような矛盾は見られないが、ここに異説として記しておく。
- (17) 劉敞『春秋權衡』巻十四、陳澧『東塾讀書記』巻十、皮錫瑞『經學通論』春秋「論『穀梁』在春秋之後、曾見『公羊』之書、所謂「一傳」即『公羊傳』を参照。なお、『公羊傳』先成説は今日、もはや定論となつた観がある。野間文史『春秋學—公羊傳と穀梁傳』（研文出版、二〇〇一年）第五章等を参照。ただし、廖平説も突飛とは言えまい。山田琢「公羊傳の成立について」（同氏『春秋學の研究』、明德出版社、一九八七年所収。初出は『金澤大學法文學部論集』哲學史學篇第四冊、一九五八年）は、注(14)所掲の『穀梁傳』について、「この『傳曰』は公羊傳を引いたものだとも考えられるが、公羊傳にも蓋とあるのだから、兩者は共に同類の説に依つたものと解すべきであろう」と述べており、廖平の説と暗合している。
- (18) ただし李賢注の「王彥」は、『漢書』では「王亥」に作る。
- (19) 序の末尾には、「同學友生錢唐張預謹紱於長沙使院」と著している。『續修四庫全書』の『古義疏』の提要によれば、張預は光緒十五年（一八八九）會試の際の廖平の房師（試験官）である。
- (20) 鎌田正氏は、おそらく『漢書』儒林房鳳傳の「由是『穀梁春秋』有尹胡申章房氏之學」との記述によつてであろうが、『穀梁家には尹・胡・申・章・房の五氏の學が起つた』（『左傳の成立と其の展開』三九七頁）としてゐる。これによれば五家とは彼らを指すとも言えそうだが、實はこれは尹・胡・申・章・房の四家に分けるのが正しい。同じく儒林傳の穀梁家の中に「楚申章昌曼君」と見え、李奇の注に「姓申章、名昌、字曼君」とある。ただ、五家が何れを指すにしても、廖平説のように彼らがそれぞれ異なるテクストを傳えたとは考えにくい。その意味でも、五家本説は特異なものと言へる。
- (21) 當該の『公羊傳』傳文は以下の通り。「何を以てか葬を書せざる。天子は崩を記し葬を記さざるは、其の時を必ずすればなり。諸侯は卒を記し葬を記すは、天子の存する有れば、其の時を必ずするを得ざればなり。（何以不書葬。天子記崩不記葬、必其時也。諸侯記卒記葬、有天子存、不得必其時也。）」
- (22) 劉向と『公羊傳』『左氏傳』との關聯については、注(9)所掲の鎌田書並びに池田・野間兩氏の論文を参照。なお廖平は、隱公元年經「冬、十有二月、蔡伯來たる（冬、十有二月、蔡伯來）」とそれ以下の傳文に對する疏の中で「劉子、『公羊』に同じき者は十條に近し（劉子同『公羊』者近十條）」と述べて、劉向説に『公羊傳』と同じものがあることを認めてゐるが、それでも六百條近い引用のうちわずかず十條と、その數はかなり限られる。『左氏傳』との關聯についても、昭公十一年經「五月甲申、夫人歸氏薨す（五月甲申、夫人歸氏薨）」に對する注・疏で劉向説を引用した後に「按ずるに、此れ劉子、『左傳』説を用ふ。劉子、『左傳』に同じき者は多し（按、此劉子用『左傳』説。劉子同『左傳』者多）」と述べて、その關聯を否定してゐるわけではない。しかし、これらの記述からも讀み取れるように、基底にあるのはあくまでも劉向を穀梁學者と

(23) する見方であると言える。  
『今古學考』卷下第六十八條を参照。